

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年
3月号
通巻595号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>

軍服姿の人物の左3人目が矢追隆家(法主)、その隣が法主の父隆藏と母フジエ



碑の文字「金鷄靈時鳥見山中聖蹟」

昭和15年12月4日の大倭神宮再建の奉祝祭典の写真と思われる。(7頁参照)

昭和39(1964)年4月8日 須佐緒祭法話より

「須佐緒」とは、結び・縁ということ

法主 矢追日聖 (満52歳)

霊界からの指図

ちょうど今日あたり桜が満開でございまして、いよいよ春たけなわという感じでございしますが、あいにく昨日あたりから天候が悪うございます。

大倭では、四月八日は須佐緒祭すさのおまつりになっております。この「すさのお」とは古い大和言葉で、ものともを繋ぎ合わすとか、結ぶとかいう意味なんです。現在も「すさ(切・寸紗)」（※繊維質の材料、刻んだワラ等。広辞苑による）という言葉が残っております。あるいは「すさの緒」とか。泥の中に混ぜて壁に塗ると、固い結びとなるんですね。そういう意味であって、出雲の神さんであるスサノオノミコトのお祭りじゃないんです。

人間対人間とか、心と心、あるいは人間と自然・動物・植物、すべてのものがお互いに交流して結ばれて、皆共存している。この神ながらの法から見て、須佐緒祭という名前になっているんです。

これは、そういった祭典行事をやれという霊界からの指図です。太陽暦の四月八日ですけれども、これが仏教徒の場合は、各寺院において花祭とか花会式はなくわいしきとか甘茶とかね、お釈迦さんがこの世にお生まれになったということを記念してお祭りをやっておられます。世界的に見ましても、東洋の大聖者である釈尊の降誕祭です。

私は別に仏教も神道も考えておりませんけれども、霊界から四月八日と指示されるというのは、大倭と、釈尊のこの世に

お生まれになったことが、どうも関係が深い、何か意味があるのだと思っっているんです。特に須佐緒という名称を付けられておるといことは、釈迦と大倭との結びということらしいですね。

四月八日という日、日本におきましては自然界が非常にきれいになって人間が喜びを持てる春です。釈尊がお生まれになったという喜びと相通するものがあるんだと思います。

ここまで我々が宗教的に教育されてきて、人間の幸福という問題を根本的に究明していく日本の精神文化というようなものも、やはり釈尊の口から出てきておるんです。釈尊がお生まれになったおかげなんです。

大倭は神ながらの宗教であるんだけど、釈尊のお説きになっておる法というものも、これは同じことなんです。仏陀の教えということで仏教と言っておりませぬけれども、釈尊自身が菩提樹下において得られた正覚しやうかく、いわゆる悟りが天地自然の法というものだったんです。

日本では、神ながらの道とか、神ながらの法とか大和言葉を使いますけども、釈尊はインドにおいてそれをお悟りになった、世界の大先覚者なんです。インドの言葉を私は知らないんですけどもね。それを今度、支那(※以降、中国)では、宇宙の妙法、大宇宙の妙法とか訳しております。人間の口で述べたり、心で量ったり、知識で解決するような、そんな浅いものではない。もっと深い宇宙の法則であり、甚深微妙しんしんびょうの法である。釈尊の悟られた内容をそう説明しているんです。

中国人が、妙法あるいは甚深微妙の法と漢字で表した言葉を、日本に持ってきて大和言葉で神ながらの大法と言ひ換えたら、何かしら、我々には言葉の意味だけでも分かるんですね。

釈迦はインドという場所にお生まれになって、

我々が言う神ながらの大法というものを悟られた。そして、いかにすればこれを知識で悟れるだろうか、知識で解決できるだろうか、いろいろな細こう分析して説明されたんですね。

人の心にある十の世界

例えば、人間の心には十の世界があるんだと、すなわち地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界と、声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界という十界に人間の心を分析してあるんです。一番下の地獄・餓鬼・畜生は三悪道でね、仏の世界は最高なんです。(※天上界までの六界は迷いの世界で、声聞界からは悟りの世界。広辞苑による)

これは聖人・君子でもどんな人でも、心の中には、こういうような働きがあるということを言われているんですよ。だからどれだけ立派な人であっても、心の中には畜生、餓鬼や修羅のような心もある。また人間や天上界のような心もある。あるいは声聞、菩薩や仏という心も持っているというように、分かりやすく説明されているんです。人が道で倒れたり自動車がひっくり返っておつたら、「ああ、かわいそうにな」と思う慈悲の心ですぐに助けるといのは、菩薩の行なんです。食堂の前を通った時に、「ええ匂いするなあ、食いたいな、腹減ったなあ」とか思うのは餓鬼の心だし、またケンカして「殴り返したるか」というような気持ちは修羅の心なんです。

じいっと考えてみ、誰でもそういう心を持っているはずなんです。偉い人でも善人でも、その裏には悪い心を持っているんです。

だから人間的に修養していく。できるだけ悪い方の心は裏に鎮め、善い方の心の働きをたくさんしていく。そういう訓練をすることだと、釈尊が

悟りの中において言われているんです。

自ら悟る味の世界

日本の神ながらの道、すなわち神道においてはね、どうすればたとえ一歩でも向上していけるかというような個人の修養を、あまり理屈で考えない。そもそも大和民族は、昔から大体、後の人に何か書いたもので教えないんです。例えば職人の技術でも、師匠は、ど頭張ることがあったかしらんけど、とにかく書いたものや口でどうこう説明せずに、自分で考えて、自分で技術を習得するよな教え方をしているんです。だから、神さんの道であつたとしても、神とはなんぞやと学校のよな説明はしてきていないんですね。

ただ自分が神さまに手を合わせて自ら悟るといような行き方が、昔から日本の神ながらの修養の方法だったんです。

ところが中国とかインドはそうではないんですね。至れり尽くせり、いろいろな言葉を使って教える。頭をひねくり回して、言い換えればこれが東洋の哲学ということになるんですけどもね。大和民族の行き方とはだいぶ違うんです。日本では、自分の持っているものを通して、自らつかんでいくという味の世界から入ってきたわけなんです。

そうしたところへ、欽明天皇か朱雀天皇の時期に、仏教が大陸から入ってきて、日本人は簡単にそれを解釈できるし、受け入れるだけの気質を持っておつたんですね。

釈迦の場合でも自分で悟られたんですからね。本を読んで研究されたんじゃないんです。釈尊ご自身はただ菩提樹に向いて座禅ですね、いわゆる無我の境地に入つて入神状態になっておる時に、この三千世界全部が分かったわけなんです。

昔の日本人もそうやって自分というものを磨いておったんです。だから、字で書いたもの、あるいは口でもって伝える大陸のいろんな文化が入ってきて、日本人はそれを噛み砕いて解釈し、取り入れることができた。それが日本で仏教が芽生えた根本の理由だと思いますね。

奈良朝の仏教の場合、本地垂迹ほんぢしせきという理屈でもって説明しました。本地ほんぢというのは元の古巣ということ、垂迹しせきというのはその古巣の影が現在の社会に出てきているということなんです。

言い換えれば、仏も、日本の神さんも先祖さんも、その靈魂は本地、つまり一つの世界におるんだ。靈の世界は一元的なものだと言うんです。

一つの世界で同じようにおった者が、人間としてインドに生まれ、中国に生まれ、あるいは日本に生まれると。その生まれたのが影ということなんです。垂迹しせきというのは影なんです。

あちらへ生まれこちらへ生まれるというように、場所を変えているだけなんだと。だから靈の世界を覗けば、これは中国人だ、これはインド人だと分け隔てるような気持ちは出てこないんです。同じ世界におった靈魂がインドへ出て、お釈迦さんとして生まれ、ひとつの法を説いてくれたと考えたら、他人行儀もなければ、今のよう国境を隔てた国際問題も起らないわけなんです。

その靈界におった者同士が何かの結び、いわゆる須佐緒すさおによって結ばれておるがために、現世においてまた顔を合わすのだと、こういうような思想が奈良朝の時にはもう既に出ております。

つまり、日本人の精神がいかに鍛えられておったかが分かります。そこまで修養してきた感覚において仏教を素直に取り入れて、日本流に解釈していったんです。ちょっとややこしい言葉ですけども、本地垂迹ほんぢしせきということ、靈界では皆が一

つになっっているんですね。

靈魂は宇宙のエネルギー

本地という魂の故郷からこの世の中に出てくることを、日本の言葉では天下ると言っているんです。靈界は高いところ、人間界は低いところだというわけですね。

靈魂というのは、我々人間だけやなしに犬にも猫にも地球にもあるんです。その魂が本体であって、姿形は影なんですね。

地球ができるまでの根元を何十億年か昔にさかのぼれば、形も何もない電気のような、一つのエネルギーに繋がる。

一番根元は何もない空くう、太た(プラス・陽)と加か(マイナス・陰)のいわゆる氣たまというものがあって、ぼちぼち運動を開始して、形のあるものそこから出てきているんです。今の時代、おかしく聞こえるかもしれないけれど、これは科学が立証すると思います。

その形、すなわち物質や肉体を生み出したところの根本の力、エネルギーというものが本体なんです。形として出てきておるものは、変化の姿であって影です。我々人間の肉体も、形のないところから出てきているんです。

その原理に基づいて、人間の心(靈魂)が何かの物質かどうか、形として分析しようとしても分からない。心というものは目に見えない、つかむこともできない。人間の肉体をどれだけ捜しまわってもどこにあるのか分からない。けれども、心があるということは皆分かっているんです。

靈魂というのは宇宙のエネルギーなんです。宇宙のエネルギーは、すなわち神様ということなんです。それが我々一人一人の肉体に入っているんです。だ

から今日は大倭へ参ろうかと、心がそう思うと肉体が付いてくる。この仕事をしようかという心が先に働くから、手も足も目も肉体全部がこぞって、その仕事に集中して活動を開始できます。

心のままに肉体は付いていくんだから、人間の場合でも、やっぱり心が本体であって肉体は影なんですよ。これは、いかなる宗教でもそのように解釈するだろうと私は思うんです。

そこでもって今日の須佐緒祭の結びということが一番大事なんです。本地という靈の世界において、お互い何かの結びのある者が、現界という形のある世界に生まれてきているんです。

もちろん結びの濃い者と薄い者の関係はあります。仏教の場合には、結びを縁えんという言葉を使っで説明しております。「袖振り合うも多生の縁」(※他生とも書く)と言いますね。前の世にあった縁で、またどこかで顔を合わすとか、仕事も一緒にするとか、仏心が起こるとかがあるんです。その縁が結びということなんです。

赤の他人は誰もいない

現代において大倭へ集まってくる人たちも、今世一代でなく、前の世あるいはもつと前の世、何かの関係において今世また集まってきている。赤の他人は誰もいないんです。物事をそのように信じられる人間になれば非常に結構だと思っんです。それが一応觀念として分かったとしても、それが自分の魂に本当に染み込まない場合は、他人行儀な態度を取っているいろいろな問題に陥るんです。現在何も結びのない人同士であったとしても、

靈の世界の結びか、幾多の時代の人間界において、例えば親子兄弟、夫婦、また師匠と弟子、殿さんと家来、あるいは仇かたきであったとかいう関係がある

んです。須佐緒によって結ばれてるんです。そういうことが大倭の宗教の根本ですが、仏教であっても一緒やと思うんです。何かの縁なんです。

縁のある者が皆こうして集まってくるんです。縁を踏まえて、とにかく神ながらの道に即した人間になろうと努めるのが宗教だと思います。

その時にね、前の世の縁を繰り返していい場合と、悪い場合があるんです。仮に前の世が仇の縁でもって今世に出てきたとすれば、顔を見ると理由なしに何かしら腹立つつというような夫婦もあるんです。前の世に師弟だったとかいう縁の場合は非常にいいかもしれないけども、仇の縁で生まれてきた人間は、相手のものの言い方ひとつにカッとしたり殴りとうなる。けど、そうしたら、前の世の悪因縁を繰り返すということになるんや。同じ悪因縁を繰り返して悪循環をしていくのでは、いつまで経っても悟れない。人間的に向上しない。自分の過去が分かっても分らないでも、どっちでもかまわないんです。分かって迷惑になる場合もあるけれど、過去はどうあろうとも、今世においては今世のお役目というものを持って皆生まれてきてるんです。過去にここに住んでおったから今世もここに住まないかとか、過去の世では学問して筆でもって仕事しとったんだから、今世の仕事もそうでないとかんとか、前の世とまったく同じではないんです。前の世で人間的に修養しておれば、今世において仕事は変わっても、精神内容が相通するような仕事を授かって生まれてきてるんですね。

人間の処は皆同じ、と信じる

そうであつても、過去に原因があつてその結果、現在生まれてきた場合はね、自分の過去の出来事

や踏んできた道と、現在というものの間には、やっぱり密接な関連性があるんですよ。

例えば私と仇の人間が今世に生まれてきたと仮定します。私は過去において戦もやっていますから、仇がたたくさんおるはずなんです。その人たちが大倭に来たら、「矢追日聖というガキめ、何とかあいつ倒したるか」というような気持ちで湧くんです。それは理屈やない、本心から出てくるんです。「どこから見ても、ええ先生や」とは思うんやけども、何か癪に障るんだというような人も、この世の中に相当おるでしょう。

私自身の過去世をずっと振り返った時に、私を恨んでいる人も、やっぱり過去との縁によって、今世に生まれてきておるはずなんです。理屈抜きに、私を恨む仇がたたくさんおると、因縁論ではそうなるんです。けれども、先ほど言うたように、過去がそうであったから、今世また同じ事を繰り返すのは悪循環であつて、最もいけないんです。

もし、これは前の世の悪因縁なんだ、悪循環を繰り返しては人間的進歩はないんだと、翻然と悟った場合、因縁を解消することができるんです。仇の因縁で生まれてきたとしても、同じような行いを繰り返すのは大間違いだ、両方がだね、自ら悟つて、本心をだんだんと良い方に切り替えていく努力をするなら、悪因縁を絶つていけるということになるんです。

坊さんを雇つて回向供養してもらおうとか、お経をたたくさん唱えてもらつたら過去の因縁は絶てるとかね、そんなものではないんです。

我々が人間的に本當に向上していこうと思えば、仏教ではまた仏教の教え方がありますけれども、大倭の場合、天地自然の神ながらの大法というものを師匠として崇拜し、絶対に帰依して信じ込んでだね、日々自分というものを作り上げてい

く。これが人間向上の最たるものなんですよ。

山岸会においては乙革命とか言っていますね。人間改革、最終的人間改造ということを一生懸命に修養している団体もあるんです。あれも非常に結構なんです。とにかく自分というものを自分で見つめることが必要なんです。

話としてはそうだけでも、どうも自分はそうはなれないんだというような人がたたくさんおります。いわゆる深い過去世の悪因縁が付いてまわる人なんです。頭では分かっても、本心、本体が付いていかない。これじゃいけないんですが、一足飛びに人間というものが出来上がるもんじゃありません。だから今より一歩でも前進するように、神ながらの法に則つて、自分というものをよく見つめて努力するんです。

大倭でも、一門も信者も出処は一つなんです。みんな霊と霊との結びによって今世に生まれてきておるといふことを、一番先にね、考えるんじゃない、信じなきゃいけないんです。考えたら絶対だめ。信じるような人間にならなくてはいけない。赤の他人は一人もいないんです。同胞なんです。皆が一つというような気持ちにならなきゃいけない。皆の臍の結が一つなんだというくらいにね、心の底から信じるような人間に自分を作っていくんです。それが一番大事なんです。

偏見とか、差別とか学生たちが今日も討論したつたけども、私から見ると、浅い意味のないことなんです。それよりも、全世界の人間の出処は一つなんだ、赤の他人は絶対にはいないんだと、そのようにすべての人を見られるような人間になつて欲しい。これは結びの根本であると思うんです。だから皆さんにもね、こゝでは他人行儀でなく、仕事を通して自分たちの使命を日々修養して欲しいとお願ひするんです。

「神通力如是」の真意をさぐる

第六回

大倭教の源流にさかのぼって

今回は、前回の令和2年1月号の註⑩に関する追記です。奇稲田姫が法主とその父の矢追隆藏氏の二人に、「ヨク今日マデ鶏杜ヲ守ツテクレタ」と礼を述べたということの意味を掘り下げて考えていきたいと思えます。(三人の念)

▼霊界で神議りされた事も、現界にてその命を受け動く人がいなければその用を成さない。顕幽相俟つての働きが物事の成就へとつながってゆく。法主よりも前に、神地大倭神宮でお生まれになった法主の父隆藏氏にも当然、その宿命というべき「一大事の因縁」があったのであろう。その事を法主の著書『ながそねの息吹』(野草社刊)の中から見てみよう。

《明治十七年一月三日、この恐ろしい神屋敷で初めての出産があった。次男が生まれた。この児が私の父隆藏だったのである。》

生まれて間もなく隆藏は泣くと胸部が大きく波打つようになった。母キシは不思議に思い、近所の赤ん坊を借りて鼻をつまみ、わざと泣かせて比べてもみた。確かに異状である。日増しに胸板は凹んでゆくのである。愛し児の行く末を案じたキシは、これにも何かの神慮があると思い、お伺いを立てたのである。

「隆藏はこの神屋敷を護り、この地を世に顕わす役目を受けてこの世に生まれてきた。神々はその宿命の『しるし』を体のどこかにつけるため議り給うた。なかなか難しい問題の様子だった。こ

の杜に座を持たれる諸神らは、何万年という永き歲月、埋れ来し胸の疼きを耐え忍び『時』のくるのを待たれていたところ、ようやくにして時機は到来したようである。もし眼や手足にすれば、不具者となり、生涯神を恨むことだろう。そこで神議は「胸」に一決したのである。神々の深き慈悲だから案ずるには及ばない。行く末を見ておれ」という意味の御神意だったようである。キシは安堵した。(26〜27頁)

※右の一文を読み返してみれば、正に法主のそれと似かよっている事に、今さらながら驚かされてしまう。又、別には、

《父は明治十七年(一八八四)一月、矢追家の次男に生まれた。奇妙な父の宿命は、矢追家というより、千有余年前に矢追(旧・箭負)の大先祖がこの問題の地に住居を構えた頃から結びついているようである。大和は広い。その広い大和の中で何故、選りにも選つて私の先祖が奇怪千萬なこの地を住居に定めなければならなかったのか。血縁か地縁か、ここで父は生まれた。私も生まれた。同病相憐れむか、折に触れて父が「この魔神め、邪神め、貧乏神め」と愚痴った昔の音が、楽しく明るく私の肚の底に残っている。》(20頁)

※の、一文もある。ここで話されている「魔神め……」の正体は、姉の北尾ジョウさんの心服する日蓮宗の遠山国子という行者の話として隆藏に語られている。

《ジョウ 御嶽坊大僧正という天狗さんはな、妖魅界天狗道の総司で天台、真言禪の奥義を極め

験行力は他に比するものが無いという大天狗さんで、沢山の眷族達と京都鞍馬山に棲んで世を恨み国を呪う魔神となつて悪業修行を重ねていたそうや。隆藏 それでは姉さん、一体天狗の正体は何ですか。ジョウ 一言で言えばな、人間に生まれてきたとき、権力欲が旺盛で、権勢を振りかざして人々を苦しめた人が、死ねばこの妖魅界天狗道に落ちるそうや。昔の武人や特権階級の人々は、大小殆どこの世界に落ちてはるのやでエ。ここでその「さま」をみて、何とか天狗達を救わなきゃ大勢の人々が苦しまはることになるし、国もつまるので、時機をみて大國主命さんが、その天狗の代表、御嶽坊大僧正を深い深い識あつて矢追の屋敷へ、今から七百年の昔に移るように命じはつたのや。そのときに、大國主の神さんは、「末世になると、この神域を汚し荒らす者が必ず出る、事の善悪を問わずビシビシと処罰せよ」という神勅だったので、鞍馬の大天狗はより拔きの荒天狗数十名をしたがえて、いよいよ妖力を發揮する時が来たと思ひ、喜び勇んでこの屋敷へ本拠を移したらしい。だから隆藏の善行も、常識も、理屈も、この天狗さんには通じなかつたわけやでエー。

天狗さんにしてみれば、偉い神さんからの命令を正直に実行しやはつたんや、仕方ないことや。そうやから「お弓」さん(注・キシに神意を伝える役目の霊人)は、紀州さんがこわいと、よう言わはつたのや。思えば紀州さんは、この恐ろしい魔王御嶽坊大僧正のことやつたんやなアー。ところがこの間、遠山の国子先生が初めてこの

天狗さんの因縁を見破らばったのや。驚いたでエ、隆藏え。

それからなア、何とこの天狗さんが、崇徳院に仕えた源為義に生まれはったのや。あの源平二氏骨肉相喰む末法修羅の世、保元、平治の大立役者としてこの世に生まれはったわけやなア。ここが凡夫では分からないところやがなア、末法闘争の気が満ちてくると、天狗さんのような権勢欲の強い靈魂がこの世に生まれ変わるのやろうなア、夏の蚊みたになア。御嶽坊大僧正は天狗道の王さんだったので、自分より偉い魔力の持ち主はないと威張っていたが、この度、国子先生の神通力によって、この天狗の王さんが初めて「仏界」を見せつけられ、腰の抜かさんほどの驚きだったようや。ここで初めて魔神だった御嶽坊大僧正が、即座に善神に変わらばったのや。そのわけはなア、この天狗さんは為義に生まれた因縁を知り、主に当たる崇徳院の怨念を奉じ、源義経(現界では孫)に憑って平家を亡ぼした大罪を心から悔い悟られて、自分の犯した罪障消滅の修行をこれから始めると誓われたのや。それはなア、源平二氏、天狗道に在るもの大小併せて十万人、その解脱の修行をすすとおっしゃるのや。

だからなア、隆藏え、大和へ帰ってこの御嶽坊大僧正を真の妙法(法華経)でお祀りして、今の日本の禍いの根源を洗ってほしいのや。

今の矢追一族の縁者の中にも、解脱さすために人間として源平かたきの者を生まれさせてあるということやでエー。(70〜73頁)

※御嶽坊大僧正と隆藏氏との、矢追の屋敷や大阪を舞台にした様々な対立は、この「一大事の因縁」の中に詳しいが、惨々な目にあった隆藏氏も、ジョウウさんや遠山国子行者の説諭の末、ようやく改心される。

その模様は次のように描かれている。

《大正九年(一九二〇)四月十五日が訪れた。隆藏は早朝からフジエ(注・生母さん)と共に神祀りの準備に忙しかった。遠山国子行者は北尾夫妻の案内で、初めて矢追の宅へ足を踏み入れたのである。あたりが静まりかえった夜の八時から、国子行者を導師として厳肅な法華経大勧請がこの神屋敷で執り行なわれた。参列者の唱える御題目の音声は、夜の静寂の中に浮かぶ如く流れ満ち、一万遍、二万遍と益々熱狂的雰囲気醸していった。一陣の風は竹藪をざわめかし、パチン、パチンと爆竹のような音だけを残す。これに応えるかの如く、導師が数珠をかざして九字を切る細かい堅い喊声(かんせい)が異様に耳目を刺戟した。顔面涙に濡れ、ただ呆然としていた隆藏の心情は察するに余りある。万感胸に迫るこの瞬間、隆藏の人生はこの「時」を軸にして大きく一八〇度回転を始め動き出したのである。(89頁)

※ここに、対立関係にあった二者は源平両族の因縁解消を目指す協力関係となり、霊界、現界において共に修行をされる事になる。

次は「一大事の因縁」の最後の一文である。《要約すれば、太古からヤマトの祖神達が籠ります登美の神奈備(矢追宅地)を舞台にして、大倭の諸神達の神意を世に「あらわし」て鎮魂するといふ本流と、それにまつわる源平二氏が犯せる罪障の因縁消滅という支流を、私は我が祖父母、両親の生涯の中から見出し、ここにその流動のあとを正直にありのまま客観的立場で記述したつもりである。(108頁)

※この「本流」については稿を改めて書いてみたい。今回は隆藏氏が如何に重い使命を霊界より与えられ、その命を果たされ帰幽されたかの再確認をするにとどめておこう。

▼フェイス出版刊『紫陽花邑』での取材記事が、『ながそねの息吹』に「わが半生を語る」として収録されている。その150〜156頁より、大倭神宮存亡の機における隆家(矢追日聖法主)の動きをたどってみる。一部省略あり。

《記者 そうしますと、結婚されて後はどういう仕事をなさったのですか。また、先生が対社会的に動かれたのは、どういうものからですか。

法主 聖蹟顕彰運動からです。この運動によって、私はいろいろな人との交渉をもつようになったんです。大倭神宮を中心としたこの附近一帯が金鶏(きんせう)発祥の地であると同時に、また神武天皇の鳥見山中靈時聖蹟の伝承地であると主張したのが私だったわけです。

科学的な資料の裏付けをもつての研究や決定は学者では絶対不可能な問題ですので、私は史的顕彰というより、日本人の民族信仰の立場においてこの問題は扱うべきものとして行動したんです。だから伝説地が各方面に多くある程有難いこととなります。史的に決定できないようなものをとらえて、他の伝説地は否定して、自分の支持する所の一ヶ所に決めたいと考えることがよくないことです。ところが政府は、皇紀二千六百年記念事業としての聖蹟決定は、『日本書紀』の「神武紀」に基づいてやると限定したのです。史料としての価値は考えないで、一応この「神武紀」が、絶対的な史実の記録と仮に認めた上での調査となったものですから、私も『書紀』に依って、それに地方の口碑伝承、あるいは地名等を加味してまとめてみたのが、『金鶏の黎明』だったということです。

昭和十二年頃から各地の顕彰運動は益々顕著になってきましたね。私も単身上京して、知名の士や高位高官の軍人達を訪問して、説得に廻ったの

です。何度か上京しているうち、小谷文清氏にめぐり会ったんです。この人は南河内の千早城の近くで生まれ、楠公精神を高揚していたのです。氏は楠公精神より聖蹟顯彰の方が遙かに崇高であり、国家的にも意義深いことを感じたでしょう。私の秘書役になって片棒をかつぎ、助けてくれた人でした。

奈良県下では、桜井、榛原、吉野の小川村などが同じ目的の運動だったもんですから、私が一番邪魔だったようです。正面からは太刀打ちできないことを彼らは知っていたんでしょう。裏からあの手この手で私の運動の妨害を考えようです。突然、ほんとは藪から棒とはこのことでしょうか、県警の部長、学務部長の名において、大倭神宮は公認神社にまぎらわしいから撤去せよという、行政処分が令書が届けられてきたのです(注：昭和15年6月24日)。法の濫用も度を越したものがありましたので、私は早速、県庁へ行きましたよ。恐らく敬神崇祖を高揚していた時代に、神社に対し法に基づくとはいえ撤去命令が出たということは、我が国においてはこれが始めの終わりと思いましたが、情けなかったですね。

神社に対して法の力で撤去させようとする役人の心が哀れでした。

大倭神宮は矢追家個人の邸内社であるのに、大勢の人々を参詣させるからというのが表向きの法的理由で、裏にはこの神宮さえ叩き壊せば、矢追の運動は停止するだろうと読んだようです。

まず学務部長にかけ合っただけです。部長は驚いて自分は知らないと言いつつ、こんな無様な命令は県として出すはずがないと言いました。令書は偽物ではなかったんです。私はすぐ上京して、内務大臣に会って行くと言いつつ立ち去ろうとすると、部長は椅子から下りて両手をついて言う

には、「たとえ、鳥居でも燈籠でもよろしい、一寸程動かして頂けば一応撤去したと認めますから。……もしこの令書を無効にすれば、県から出す令書の悉が駄目になりますので、ここは、どうか私の顔をたてて許して欲しい」と頼まれました。私は役人の弱さを見せられたので同情してしまいましたね……。

それから、社寺兵事課へ参りました。課長は発令したその日は徴兵検査があったので、県庁にはいなかったから知らないと言っています。課長補佐のような位置にあった県属の津田辰三氏個人が発令したことが分かったのです。津田氏は神宮へ来て全部取り壊せ、お社は家族だけ詣ればよいから、板の高屏でかこいせよと二間尺を振り廻してましたね。この日、生駒署の署長は、神様の取り壊しはいやだから仲裁しようとして現地へ来てくれました。ここは生駒署の管轄でしたから。津田氏はいきりたつて話にならないので、署長は憤慨して帰ってしまっただけです。小谷文清氏は、

鴉杜に鳴くや地鳥みのおわり
と短冊に書いて神前にぶらさげていました。部長の心に免じて、所定の日に石工を雇って鳥居や燈籠等を下ろし始めた時、今の奈良市会議員の松本伍史さんがやってきて、声をあげて泣きながらこの破壊行為を手伝ってくれた。地元の人々は挙げて私の運動に心から協力してくれたんですよ。

この行為は生駒署がやるつもりですが、「こんな恐ろしいことを壊して、えらい厳罰でも当たってみたい、安月給で家族を養っている我々にとつては死活の大問題だから、どうか大倭の方でやって欲しい」とこれまた懇願されたので、これもごもつともだと思ひ、私達の手でやったのです。

仕事にかかった時、遠くから見えていた署長以下数名の巡查達は、「撤去と認めます」と大声で叫

んで、さっさと現状も見ないで立ち去りました。

明るく朝、同じ顔が集まって石組みを始め、前から神社らしく元の姿に直りました。更に署長から交換条件だった建築許可をもらって、休息兼社務所は屋根に千木を立ててね、武道場も造った。竣工した時、村の団体や警察関係、県庁等へ案内状を発し盛大なお祭り(表紙写真)をしたのです。

神宮の建設物を撤去した日、ちょっと忘れましたが、満州か支那かどちらかですが、何家の宮さんだったのかな? とにかく飛行機が墜落して亡くなられたことがあったと記憶しています、調べれば簡単に分かることですが……。

政府は、聖蹟として、金鶏発祥を北倭村、富雄村にわたる地方に定め「鴉杜」として決定したのです。鳥見山中靈時を桜井にね。言わば北と南にそれぞれ聖蹟を割ったあたり、政治的な動きをかなり感じるのですが……。神宮でのこの事件があったから一年たないうちに津田氏は悶死して果てたことは事実のようです。こんな貧乏クジを引いて生まれた彼に対し、一日も早く浄霊するよう、私は祈りました。

法律は人々が幸せになるようにとの目的で制定されたものと思っていたのに、神社法規によって神社が破壊されるとは想像もしてませんでしたね。大きく言うならば有史以来の重大事件とも言えます。日本ではめつたことですからね。大倭神宮はひとつの歴史をつくりましたね。法で壊されるなら、法でまた守る方法がその裏にあるのがあたりまえという下心はいつももっていましたよ。大倭の万霊に仕え、僅かに残されてきたこの神域を守るのが、われわれ親子三代にわたる宿命でもありますので、神意を戴いて、神意と共に死する決意はもっていたのですよ。争いはさけて、神ながらにね。》

あじさい日誌

2月15日 大倭神宮月次祭。

この日、神宮の奥津齋庭に、近頃の身勝手な侵入者に対する進入禁止の立て札が立てられました。

2月21日 大倭会会員の奈良県宇陀市の杉本三智子さん(88歳)さんが帰幽されました。

2月23日 午後1時20分から大倭神宮において申孝祭が行われた後、紫陽花邑に戻って2時から拝殿で大本宮月次祭が行われました。

祭典後、この日は昭和51年2

月23日の、大倭神宮社務所竣工報告祭および申孝祭、月次祭における法話をお聞きしました。

『おおやまと』紙への掲載は、前半が平成14年2・3月号「大倭神宮について(その一)」、後半が昭和51年3月号「自他の幸せを祈る」と分かれて

見えています。なおこれまで発行された新聞類は、拝殿下の倉庫に整理されています。自分で自由に

見てもOK、ご要望があれば送らせてもらいます。2月29日 神奈川県横浜市の加藤彰彦・晴美夫妻と息子さんの祐輔・美智子夫妻が岸田哲さんの案内で来邑、杉本順一さんと

令和2(2020)年大倭会行事のお知らせ

禊 会 毎月第2日曜日

文化行事

第345回 4月19日(日)／

神泉苑にクシイナダヒメを訪ねて

第346回 5月17日(日)／石上神宮

第347回 10月24日(土)・25日(日)・26日(月)／

法主様の足跡を訪ねて佐渡への旅

(2泊3日、直江津港からの途中参加可能)

文化講演会 11月14日(土)／ 検討中

大倭会へのお誘い 年会費1万円

郵便振替 : 01060-6-31705

第345回大倭会文化行事

神泉苑にクシイナダヒメを訪ねて ～春の京都市内散策～

日にち 令和2年4月19日(日) 雨天決行

集 合 JR山陰線(嵯峨野線)

二条駅改札東口に、午前10時半

交 通 近鉄学園前9:00発奈良行(快速急行)→

西大寺9:03着、9:07発京都行(急行)に乗り

換え(なるべく前方車両)→京都9:48着→

32番ホーム山陰本線へ徒歩4分。

9:58発園部行(快速)→二条駅10:02着

行 程 二条駅～(徒歩10分)～神泉苑

～(徒歩15分)～二条城 ※昼食はお店で

連 絡 林修三 携帯 080-2527-0840

敬談。大倭会館で一泊、翌日、大倭神宮に参拝されました。3月5日 午後1時から教務本庁で『おおやまと』編集会議の後、三人の会が行われました。3月6日 大倭神宮月次祭。午後6時半から大倭会館において、主だった邑人の連絡の機会である邑倭の会が開かれました。

3月8日 禊会が行われました。大倭安宿苑では2月25日 3名の令和2年度新卒採用者事前研修会。キラキラとした目が続きますように！(菅原園)2月6日 美容師さん達が来園、カットをしてもらったり、おしゃべりを楽しんだりしました。2月15日 音楽療法士により数名が定期的なレッスン。(須加宮寮)2月20日 ホットプレートでモダン焼きの昼食でした。(長曾根寮)2月17日(デイサービス)卵の殻でお雛様とお内裏様を作りました。2月20日(特養)ちよつとご馳走とショートケーキで8名の方の誕生日をお祝いしました。(茂毛路園)2月14日 おやつはチョコレイトケーキ。女性から男性へ日頃

あんない

***月次祭(大倭神宮)**
4月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

***須佐緒祭(大本宮)**
4月8日(水) 午前11時より大倭大本宮拝殿において祭典を行い正午より各自持参の弁当などで園遊会を行います。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐(結び)の緒に感謝をするお祭りです。

***大倭会主催第615回禊会**
4月12日(日) 午後2時から大倭大本宮拝殿にて。

***箭負祭(大倭神宮)**
4月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮りまず登美の神奈備(大倭神宮)の靈威を法主日聖大恩師の遠祖(箭負氏)が代々祭祀し、神仕

えしてきたことを記念するお祭りです。

***月次祭(大本宮)**
4月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。